＜メディアウオッチ＞

北海道電力が枝野経産相の「指示」受け一転、会見オープン化へ

上出（かみで） 義樹

原発の賛否に絡む「やらせ」に批判が噴出する北海道電力（北電）の社長記者会見などからフリー・雑誌記者ら締め出されている問題で、北電はこれまでの「排除」の姿勢を突然、転換し、会見オープン化の方針を固めた。

電力担当の枝野幸男経産相が 11 月 29 日、閣議後定例会見での筆者の質問に応じる形で、全電力会社に会見オープン化を促す「指示」をしたこと（12 月 2 日付「メディアウオッチ」で既報）を受けての新展開である。ただ、大臣の「ツルの一声」が“主役”だけに、フリー・雑誌記者らの反応は複雑だ。

フリー・雑誌記者らを排除

北電の記者会見問題の経緯とその背景をざっと整理する。

２年前の政権交代後、中央省庁の大臣会見では防衛省など一部の省庁を除き、フリーや雑誌、ネットメディアの記者らも条件付きながら参加できるようになった。また、福島第一原発の事故発生以来開かれている東京電力の記者会見なども、フリー記者の参加資格に制限はあるが、原則として「オープン化」されている。ところが、北電主催の会見は北海道経済記者クラブ加盟の新聞・放送各社の記者に限定。中央省庁の会見ではフリー記者のような署名原稿提出などの必要もなく参加できる雑誌協会加盟社の記者まで、締め出されている。

大臣会見でのフリー記者の質問で急展開

筆者が、「公益企業としては問題でないか」と枝野経産相に最初に質問したのが、11 月 4 日の定例の閣議後会見。枝野経産相からは、「一般論」としながらも、「高い公益性を持つ企業は政府に準じた高い透明性が必要」などと、かなり強い口調で同社の会見運営を“批判”する言葉が聞かれた。

しかし、事態はその後も一向に改善されず。逆に、この北電会見問題を熱心に取り上げてきた地元月刊誌「北方ジャーナル」の小笠原淳記者が、同誌 12 月号 で、北電への「悪意」ある記事を書いたとして、個別取材にも応じない「出入り禁止」を北電から言い渡された。

そこで、筆者が 11 月 29 日の閣議後会見で再び質問をしたところ、枝野経産相は「政府が行う記者会見の透明性に準じて（電力会社の会見も）行う必要があると思うので、全電力会社にその趣旨を指示する」と明快に回答。前回はな

かった「電力会社への指示」という、さらに踏み込んだ言葉が返ってきた。

大臣の「指示」は、ただちに実行に移された。とくに北電に対しては他社に先駆け、会見と同じ日の 29 日付の「指示」文書が翌日には、同省資源エレルギー庁電力・ガス事業部政策課から、同社東京支社の担当者に手渡された。

12 月に入ると北電は、「北方ジャーナル」誌の小笠原記者の「取材拒否」を解除。まだ地元の記者クラブとの調整などが残っているが、北電は記者会見オープン化の方針を固め、このことを既に小笠原記者らにも伝えている。

「裸の王様」も逆らえない「ツルの一声」

北電の記者会見問題は、もし、大臣会見がフリー記者を排除していたら、質問さえ出なかったかもしれない。その証拠に、東京でも札幌でも、「報道の自由」に関わる重要な問題であるにもかかわらず、残念ながら、記者クラブに加入する「既存メディア」は、ただ黙殺するだけだった。北電以外にも、フリー記者らを締め出す電力会社が少なくないようだが、多様な種類の記者が参加できる「オープン化」の大切さを今回は身を以て実感した。

「キツネにつままれたよう」　フリー・雑誌記者らは複雑な反応

北電は他の電力会社同様に地域経済に君臨し、地元では怖いものがない、いわば「裸の王様」である。その北電が担当大臣の「ツルの一声」で、手のひらを返すように会見オープン化の方針を示したことに対し、小笠原記者をはじめフリー・雑誌の記者らは「今まで自分がやってきたことはな何だったんだろうと正直、キツネにつままれたような気持ち」「われわれの要求は無視し、『天の声』には卑屈に従う。原発の『やらせ』問題での道民軽視と根は同じ」「公益企業としての自覚を欠く北電の体質は何ら変わったわけでない」などと、ある種の戸惑いを含め率直な感想や批判を口にする。

「裸の王様」と「ツルの一声」。一般人にはわかりにくい複雑で隠微な力関係と「権力」の構図を、今回の記者会見問題から、垣間見る思いがした。

（かみで・よしき）　北海道新聞社で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在、フリーランス記者。上智大大学院（新聞学専攻）在学中。